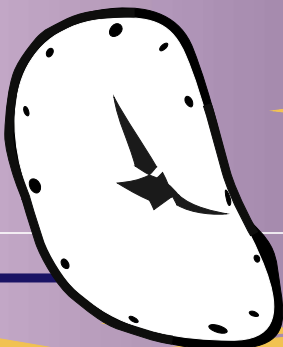


令和元年度考古学ゼミナール

時代の移行期を探る



◆令和元年度 考古学ゼミナール◆

「時代の移行期を探る」

◆日程 ※各講の後に質疑・休憩

開講式	10月19日(土)	13:00~13:10
第1講	同	13:10~14:40
第2講	同	15:00~16:30
第3講	10月26日(土)	13:00~14:30
第4講	同	15:00~16:30
第5講	11月2日(土)	14:00~16:00
修了式	同	16:20~16:30

◆要旨集 目次

講師紹介		・・・ 2
講義要旨		
第1講 「近代社会の始まり」		・・・ 3
	尚美学園大学教授 櫻井 準也	
第2講 「中世から近世へ —歴史考古学の課題—」		・・・ 13
	東京大学名誉教授 五味 文彦	
第3講 「古墳の終焉と古代の始まり」		・・・ 18
	國學院大学准教授 青木 敬	
第4講 「旧石器時代から縄文時代へ —はじめて土器を手にした人たち—」		・・・ 22
	明治大学准教授 藤山 龍造	
第5講 「弥生時代の終わり」と古墳時代の始まり」		・・・ 27
	茨城大学教授 田中 裕	

会場 かながわ県民センター 2階ホール 横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2

講師紹介

櫻井 準也 (さくらい じゅんや)

尚美学園大学教授 博士 (史学)

慶應義塾大学大学院 慶應義塾大学助教授を経て現職

著作：『考古学とポピュラー・カルチャー』（同成社）、『ガラス瓶の考古学』（六一書房）ほか多数

五味 文彦 (ごみ ふみひこ)

東京大学・放送大学名誉教授 博士 (文学)

東京大学大学院 東京大学教授を経て 2006 年定年退任、その後放送大学教授、2016 年定年退任

著作：『日本の歴史を旅する』（岩波新書）、『院政期社会の研究』（山川出版社）ほか多数

青木 敬 (あおき たかし)

國學院大学准教授・奈良文化財研究所客員研究員 博士 (歴史学)

國學院大学大学院 鎌倉市教育委員会技術吏員 奈良文化財研究所主任研究員等を経て現職

著作：『土木技術の古代史』（吉川弘文館）、『古墳築造の研究』（六一書房）ほか多数

藤山 龍造 (ふじやま りゅうぞう)

明治大学准教授 博士 (史学)

慶應義塾大学大学院 明治大学研究・知財戦略機構客員研究員 慶應義塾大学矢上地区文化財調査室助教を経て現職

著作：『時空をこえた対話』（六一書房）、『環境変化と縄文社会の幕開け』（雄山閣）ほか多数

田中 裕 (たなか ゆたか)

茨城大学教授 修士 (文学)

筑波大学大学院 財団法人千葉県文化財センター研究員 千葉県教育庁文化財主事を経て現職

著作：『考古学リーダー 4 東日本における古墳の出現』（六一書房）、

共著『常陸の古墳群』（六一書房）ほか多数

近代社会の始まり

櫻井 準也 (尚美学園大学 教授)

1. 考古学における画期と移行期

本ゼミナールのテーマである「時代の移行期を探る」は、ある時代から次の時代への移行期の問題を扱うものであるが、この問題を扱うためには歴史学や考古学における時代区分の実態について検討する必要がある。昨今、中世の始まりを何時にするかといった時代区分の問題は歴史教科書との関連もあり話題になっているが（山本ほか 2008、高橋・三谷・村瀬 2016 など）、この点はわが国の近代についても同様である。わが国における近代は一般に「広義には近世と同義で一般には封建制社会のあとをうけた資本主義社会についていう。日本史では明治維新から太平洋戦争の終結までとするのが通説」（『広辞苑 第5版』）などと定義されているが、政治史的な時代区分は他の専門分野にとって受け入れられるものではなく、経済史では開国期、生活史では日清・日露戦争の頃というように立場によって近代の始まりの捉え方が異なってくる。

これに対して考古学の分野では、画期という表現が多用される。近藤義郎が論じているように、かつての日本考古学では「特徴的で、重要で、普遍化していく考古資料」の出現をもって画期が設定されてきた（近藤 1986）。具体的には縄文時代における縄文土器、弥生時代における水田、古墳時代における古墳ということになるが、わが国で実施された発掘調査の成果によってこのような単純な原則がもはや通用しないことが明らかになっている。また、近藤は考古学が「全体を律するようなグローバルな時代設定はできないように見える」、「過去・現在の材質・技術区分に依拠する限り、せいぜい石器時代と金属器時代ないし鉄器時代を、すべての集団が辿った段階として考古学的に区分できるに過ぎないといえないだろうか」（近藤 1986、11 頁）と述べたうえで、人類史的時代ないし段階区分の展開原理として、技術的基準、経済的基準、政治史的発達の諸段階を設定している。

今回テーマである移行期の問題は、時代の画期だけではなく移行期を認めることが前提となるが、対象とする時代の守備範囲が広い考古学においてはすべての時代を一律に議論することは難しい。先史時代の場合は発掘された遺構や遺物など考古資料を中心に議論が展開されるが、歴史考古学の場合は出土遺物の編年研究などの基礎研究に加えて文献史料など様々な関連資料を検討することになり、そこで展開されている議論やその背景について理解することが要求される。

2. 近代とはどのような時代か

社会学者のアンソニー・ギディンズは近代の制度的特徴として、資本主義（私的所有・競争を旨とする資本蓄積）、産業主義（自然界の変容・「創出環境」の発達）、監視（国民国家の集権的な情報管理と社会的監視）、軍事力（国民国家の暴力手段の管理）をあげ、制度としての近代の特徴を示している（ギディンズ 1993）。また、マックス・ウェーバーは近代という時代が「魔術（宗教や迷信）からの開放」、「事象化」、「合理化」の時代であると述べているが、目的と手段の関係が非人格化すること、業績が自己目的化すること、計算可能性が前提となって合理化が図られることが近代的精神の特徴であるとしている。また、伝統的な「円環的時間」から進歩の概念と密接に結びついた「直線的时间」へという近代的時間観念の獲得という近代化に伴う時間観念の変化も極めて重要な問題である（今村 1994）。

これに対して、わが国では「西欧化」、「都市化」、「工業化」、「国家の台頭」といったキーワードで表現されるような観点から近代あるいは近代化が語られてきたが、これらの表現はわかりやすいが単純化され過ぎているといえる。また、こうした表現をする際には開国や明治維新以降の時代を議論の対象とすることが多く、わが国の近代化の下地を作った江戸時代に遡ってわが国の近代化について語られないことも問題である。江戸時代に遡ってわが国の近代化について考えることは、18世紀における洋学（蘭学）の流行だけでなく、大蔵永常の合理的農業思想にみられるような近世における合理主義思想、さらには儒学（朱子学）などの近世思想がわが国の近代化に果たした役割（源 1973）などについても検討するということである。

また、わが国では近代化に伴って日本人の生活や社会が急激にあるいは劇的に変化したと考えがちであるが、その実態は異なるようである。政権の交代などは異なり、社会や文化を時代の変化すなわち時間軸で考える場合は「連続性」や「不連続性」という観点から様々な事象を捉える必要がある（メタ・アーケオロジー研究会 2005）。具体例をあげるならば、「連続性」については江戸の重要なインフラである水道の埋設工法がそのまま東京へ受け継がれていることが指摘できる。水道は近代になって木樋から鉄管へと変わるが、現在のような加圧式水道が敷設されたのが 1899（明治 32）年以降のことであり、近世からの「連続性」が長期間にわたって認められる。これに対して、「不連続性」については、幕末・明治時代に建設された鉄道、ガス灯、煉瓦建物などの施設はそれ以前のわが国にはなかったものであり、その意味で近代化や西洋化を象徴する施設であるといえる。このように、わが国の近代化を開国や文明開化に伴う西洋文化の受容という「不連続性」のみで捉えるのではなく、近世からの「連続性」で捉えることが重要であるが、そのことは発掘調査などの考古学的方法によって示すことができる。

3. モノの生産をめぐって

（1）近代技術の受容（図 1）

江戸時代のわが国は手工業中心の産業構造であり、幕末期になって諸藩が大砲や蒸気船の製作を試みたものの欧米との技術差は歴然としていた。その後明治政府は工業化政策を積極的に推し進め、1870（明治 3 年）に工部省を設け、工学寮・観工寮・鉱山寮・鉄道寮などを設置したが、工業化が

本格的に始動したのは明治時代中期以降のことである。西洋技術習得の背景には、江戸時代以来の蘭学による知識の蓄積、幕末・明治の留学生、明治初期のお雇い外国人が重要な役割を果たしたが、18世紀の家内制手工業、19世紀の工場制手工業（マニファクチュア）にみられるような在来技術の質の高さや江戸時代の教育水準の高さもあげられる。また、モノ生産においてわが国の職人は高い能力を発揮した。例えば、日本で貿易商をやっていたルドルフは西洋造船技術についてなにも知らない日本人がロシアのプチャーチンが乗船し沈没したディアナ号の代船を伊豆の戸田で造った際に、一度で建造方法をマスターしたと述べている（小島 1989）。こうした職人たちの能力は幕末・明治時代の擬洋風建築などで発揮されたが、技術的にみるとわが国の新技術の多くは外来技術を部分的に取り入れた「折衷技術」であり、戦後になるまでわが国は欧米の新技術をすべて受け入れるほど技術水準は高くなかった（鈴木 1999）。

また、職人が使用者の要望に合わせて一つ一つ道具作っていた伝統的なわが国のモノ作りに対し、欧米では蒸気機関の発明による動力化（機械化）だけではなく、同一規格の部品を生産し、部品を交換するという「互換式生産方式」（ホイットニーの小銃）やベルトコンベアーなどを使用した「ライン製造」（フォードシステム）といった従来なかった革新的な生産システムによってモノの規格化や大量生産を可能にした点にも考慮する必要がある。

（2）近代遺物と生産技術

発掘調査によって遺跡から出土する近代遺物には、近代以前からわが国に存在したもの、近代以前にも存在したが生産量が少なく生産技術も西欧に劣っていたもの、近代以前にはわが国には存在しなかったものに大まかに区分できる。このうち近代以前から存在し、近代以降も引き続き生産されている遺物として陶磁器・土器・瓦などがある。磁器生産においては、近代になって機械ロクロが導入され、酸化コバルトや酸化クロムが利用されるようになり、従来の「手描き」に加えて明治10年代に普及した「型紙摺り」や明治20年代に普及した「銅版転写」による絵付け技法が登場して効率的な絵付けが可能になった。その後も飯茶碗では大正時代から昭和時代初期にかけての「吹き絵」の流行や大正時代中頃以降の「ゴム版絵付け」の普及、さらには昭和30年代の「スクリーン転写」による絵付け（プリント）が一般化するが、これらの絵付けの効率化は製品の大量生産を前提としたものである。素焼きの土器や瓦などについては近世から近代にかけて基本的な窯構造は変わらず、土器製作技術でもロクロ成形や板づくり、型づくりといった基本的技術に変化はみられない。ただし、土練機や機械ロクロの使用、それに伴う石膏型の導入、さらには人形生産などで電気釜が導入された。

これに対し、近代以前にも存在したものの生産量が少なく、明治時代以降になって普及した遺物としてガラス瓶があげられる。ガラス瓶は明治時代中期に国産ビール瓶が製造されたが、その後輸入製瓶機によって量産化され、大正時代になると品質が向上し、化粧瓶などを中心に様々な形態や色調の製品が登場するようになった。さらに、近代以前にはわが国で生産されなかった遺物として代表的なものが建築資材の煉瓦である。近代における煉瓦生産は幕末期の佐賀（耐火煉瓦）や長崎（普通煉瓦）で製造されたものが最初とされているが、当初は「手抜き」と呼ばれ一個一個人間によって成形される方法で生産され、その後明治時代中期に「機械抜き」成形によって大量生産が可

能になった。焼成についてもホフマン窯の導入によって大量に焼くことが可能になった。

4. 出土遺物にみる民衆生活の近代化

わが国において近代への移行について考える場合、最初に思い浮かぶのが開国によって箱館（函館）、神奈川（横浜）、長崎、兵庫（神戸）、新潟の5港が開港され、それに伴って外国人居留地が設けられたことである。なお、1859（安政6）年に設けられた横浜の外国人居留地（山下町居留地遺跡）をはじめ神戸の神戸居留地遺跡、東京の外国人居留地（中央区明石町遺跡）などで発掘調査が近年実施され、注目されている（桜井（編）2015）。また、来日外国人の避暑願望やわが国の上流階層のライフスタイルの西洋化により、軽井沢などの高原や大磯・鎌倉などの海浜部に作られた別荘地もわが国の近代化を象徴する存在である（安島・十代田 1991）。こうした外国人居留地や別荘地は当時の錦絵や旅行ガイドブックなどで盛んに紹介され多くの日本人が見物に行ったが、これらは突然現れた「日本の中の西洋」であり、わが国の近代においては「連続性」ではなく「不連続性」を象徴する場であるといえる。

これに対し、わが国の民衆にとって近代はどのように訪れたのであろうか。その点を究明するためには、まず近代以降のインフラ整備の状況を把握する必要がある（図2）。当時の家庭生活における基本的なインフラとして光源・熱源・水源があげられるが、光源については明治時代初年までは灯油（菜種・綿実の搾り油）を用いた行灯・燈台、和ろうそくを用いた燭台・提灯が使用されていたが（大都市や開港場にガス灯が登場している）、明治10年代にはランプが普及している。電灯については、1888（明治21）年に東京で電力供給が開始され、明治時代末～大正時代初期に急速に普及したが、1913（大正2）年の段階でも普及率は全国戸数の約1/3程度であり、地方の山村などではランプなどに頼った生活を強いられていた。次に、熱源については、わが国では明治時代から昭和時代にかけて竈、コンロ、七輪、火鉢などに薪や炭が使用されてきたが、明治時代後期から大正時代にかけて都市部を中心に電気を熱源として使用するようになった。現在普及している熱用ガス（都市ガス）については、1899（明治32）年に熱用ガス利用が始まり、1930（昭和5）年頃から全国的に普及している。また、水源については東京などの都市部を除くと明治時代までの水源は湧水・流水・井戸に依存する「水汲み」の時代が続いた。近代水道は1887（明治20）年の神奈川県新水道（横浜）が最初であり、全国的な普及率は著しく低く、1916（大正5）年の段階で給水戸数は全体戸数の3.6%であり、給水戸数の56.8%が共同栓利用という状態であった（古島1996、日本生活学会（編）1999）。また、近代遺物について検討する際には、各種の生活財に使用される素材が江戸時代以来の粘土・陶石・木・竹・紙・漆・鉄・銅・真鍮などに加えて、ブリキ、アルミ、琺瑯、アルマイト、プラスチック（合成樹脂：セルロイド・ペークライト・石油系プラスチックなど）が使用されるようになったことをあらかじめ理解しておく必要がある。

ここで実際の発掘調査事例として私たちが発掘調査を実施した神奈川県三浦市ヤキバの塚遺跡（図3）を紹介する（三浦の塚研究会 2003）。本遺跡からは明治時代から戦後にかけて周囲の集落から廃棄された大量の生活財が出土している。また、この調査では層位発掘を実施し、すべての土壌の篩がけを行うなど先史考古学的な発掘調査手法を取り入れた。このような塚（ゴミ塚）は地元

で「ケンガラバ」と呼ばれているが、本遺跡は現状で東西方向約 20m、南北方向約 15m、高さは 2.5 m に及び、塚からは周辺の海で採れた多量の貝類に混じって、陶磁器やガラス製品などの生活財、釣針・土錘・蛸壺などの漁具が多数出土している。各層位の形成年代は最下層の 9 層が明治 10 年代頃、6～8 層が明治 20～30 年代頃、5 層が明治 30～40 年代頃、4 層が明治時代末から大正時代頃、3 層が大正時代から昭和時代初期頃、2 層が昭和時代初期頃、1 層が戦中前後、表土層が戦中～戦後と推定されている。本遺跡では層位発掘を実施したため、出土資料は近現代遺物の編年研究に貢献することが期待されるが、それ以外にもムラの近代化の様子を発掘された生活財を通じて明らかにすることができた。具体的には、明治時代から戦後にいたる「灯火具類」や「化粧道具」などの変遷である。まず、「灯火具類」については江戸時代以来の行灯などに使用される秉燭や灯明皿が大正時代頃の層まで出土し、それに代わって電灯の笠や電球、碍子などが出土するようになっている。また、ランプの部品や火屋は明治 10 年代から戦中頃にかけての層から出土しており、電気の時代になってもランプが納屋や土蔵などで使用され、保管されていたことが窺える。これに対し「化粧道具」は、お歯黒道具である鉄漿坏や鉄漿壺、また日本髪には欠かせない油壺が明治時代末から大正時代頃の層まで出土しており、この頃にはお歯黒の風習がなくなり、日本髪を結う女性が少なくなってきたことが想像できる。このように、この地域において伝統的生活スタイルが近代的生活スタイルへと大きく変化した画期がこの地域に電気が供給されるようになった大正時代頃であることが出土した近現代遺物（生活財）の変化から読み取ることができる。

おわりに—考古学から日本の近代を考える

(1) 遺物変化の歴史的背景を探る

考古学では出土した遺物を器種ごとに集成して編年を試み、遺構や層位ごとに遺物組成（アセンブリッジ）を検討する。これらは考古学にとって基礎的作業であるが、横浜に所縁が深い考古学者である和島誠一は物のあり方から「背後の歴史的関係を掴むこと」こそ考古学に求められると述べているように（和島 1953）、文献史料などによって遺跡や遺物をめぐる様々な情報を得ることができる歴史時代の考古学においては、それらの分析結果の背景を考察することが重要である。例えば、近世考古学において画期について検討すると、18 世紀後半には江戸で陶磁器の産地・器種が多様化し、19 世紀初頭に磁器の生産地が拡大し、磁器（新製焼）生産が開始され、19 世紀前半に遺物量が増加するという傾向がみられるが（森本 2009）、その背景に陶磁器の生産や流通の問題だけでなく殖産興業をめぐる各藩の思惑がある。これと呼応するように酒器も 19 世紀になって銚子・爛鍋・ちろりから爛徳利（磁器）へと変わり（成瀬 2000）、当時の宴会の様子が変化している。また、特定の器種の変化についても同様である。明治時代から高度経済成長期にかけての飯茶碗の形態変化の背景として、一人あたりの米の消費量、食卓形式（石毛・井上（編）1991）、動作や食事作法（神崎 1996）も考慮すべきであるが、近代のガラス瓶にはその中身や使用法だけでなく、牛乳瓶のように衛生管理という観点から法律によって色調や形状が規定されたものがある（桜井 2019）。

(2) 近代的心性の獲得

このように、考古学の分野からわが国の近代について検討してみると、わが国の近代化の様相は様々な考古資料に反映されることがわかる。しかし、わが国の近代化について考える場合、従来のような技術的・経済的・政治的な側面だけでなく、近代的心性の獲得という観点から考えることも重要である。私がこのように感じるようになったのは、1990年代に認知考古学という新しい研究分野に興味を抱いて遺構や遺物から先史時代の人々の認知構造を明らかにしようとした際に、日本人の近代的心性の獲得という問題を意識せざるを得なくなったためである（桜井 2004b）。マックス・ウェーバーが近代の特徴として「(計算可能性が前提となる)合理化」をあげたことは既に述べたが、こうした視点で遺物を観察すると限られた環境のもとではあるが近代以前の資料においてもこの状況を確認することができる。また、わが国の別荘地における空間利用の歴史と近代的心性とのかかわりなど興味深い問題も多く存在するが、こうした考古資料に残された様々な痕跡について心性史という観点から時代を越えてわが国の歴史を捉えなおしてみることも必要であろう。

「近代社会の始まり」を考えることはわが国の近代化について考えることに他ならない。残念ながらわが国の考古学界で近代化をテーマにしたシンポジウムははまだ開催されていないが、その場合は近現代考古学だけでなく近世考古学の専門家、そして歴史学・経済史・科学史・思想史など多くの関連分野の研究者との議論が必要となってくる。今後、考古学が主導して日本の近代化についてグローバルな視点で語る日が来ることを期待したい。

主要参考文献

- 石毛直道・井上忠司（編）1991『国立民族学博物館研究報告別冊 現代日本における家庭と食卓』
今村仁司 1994『近代性の構造』講談社
江戸遺跡研究会（編）2001『図説江戸考古学研究事典』柏書房
江戸遺跡研究会（編）2018『江戸遺跡研究会第 31 回大会 遺物にみる幕末・明治 [発表要旨]』
神崎宣武 1996 『「うつわ」を食らう 日本人と食事の文化』日本放送出版協会
ギーディオソ、S.（榮久庵祥二訳）1977『機械化の文化史』鹿島出版会
ギデンズ、A.（松尾精文・小幡正敏訳）1993『近代とはいかなる時代か?』而立書房
小島慶三 1989『江戸の産業ルネッサンス』中央公論社
小林昭 1993『「モノづくり」の哲学』工業調査会
五味文彦・鳥海靖（編）2009『もういちど読む山川日本史』山川出版社
近藤義郎 1986「総論—変化・画期・時代区分—」『岩波講座日本考古学 6 変化と画期』岩波書店
桜井準也 2000「近代遺物の表象」『メタ・アーケオロジー』第2号
桜井準也 2004a『モノが語る日本の近現代生活』慶應義塾大学出版会
桜井準也 2004b『知覚と認知の考古学』雄山閣
桜井準也（編）2015「近・現代考古学—居留地・別荘地の考古学」『考古学ジャーナル』No.668
桜井準也 2018「近・現代」日本考古学協会編『日本考古学・最前線』雄山閣
桜井準也 2019『増補版 ガラス瓶の考古学』六一書房


富永樹之 2001 「近代の染付飯茶碗の変遷」『青山考古』第 18 号
日本生活学会（編）1999『台所の 100 年』ドメス出版
鈴木公雄ゼミナール（編）2007『近世・近現代考古学入門』慶應義塾大学出版会
鈴木 淳 1999『日本の近代 15 新技術の社会誌』中央公論新社
高橋秀樹・三谷芳幸・村瀬信一 2016『ここまで変わった日本史教科書』吉川弘文館
中岡哲郎・鈴木 淳・堤 一郎・宮地正人（編）2001『新体系日本史 11 産業技術史』山川出版社
長佐古真也 2007「続・お茶碗考」小川望・小林克・両角まり（編）『考古学が語る日本の近現代』同
成社
成瀬晃司 2000「江戸における日本酒流通と飲酒習慣の変遷」江戸遺跡研究会（編）『江戸文化の考
古学』吉川弘文館
林屋辰三郎（編）1976『化政文化の研究』岩波書店
古島敏雄 1996『台所用具の近代史』有斐閣
三浦の塚研究会 2003『漁村の考古学 三浦半島における近現代貝塚調査の概要』
水野信太郎 1993『赤れんが物語』舞鶴市赤れんが博物館
源 了圓 1973『徳川思想小史』中央公論社
メタ・アーケオロジー研究会（編）2005『近現代考古学の射程』六一書房
森本伊知郎 2009『近世陶磁器の考古学』雄山閣
安島博幸・十代田 朗 1991『日本別荘史ノート』住まいの図書館出版局
山崎俊雄・玉川寛治（編）2000『日本の産業遺産Ⅱ』玉川大学出版部
山本博文ほか 2008『こんなに変わった歴史教科書』東京書籍
和島誠一 1953「歴史学と考古学」『日本歴史講座 第 1 巻』河出書房

キリスト暦		901	06	11	16	21	26	31	36	
天皇暦	明治中期以前 (江戸期を含む)	明治後半時代 M34	99	43	T1	5	10	S1	6	11

	1941	46	51	56	61	66	71	76	81	86	91	96	2001
	戦後昭和時代				(戦後)昭和中期				昭和末期		平成時代・世紀末時代		
	516	21	26	31	36	41	46	51	56	61	H9	8	13

①固形燃料

1876釜焚きマツチ製造
76須藤炭発光
付木、火打ち石
薪、たき木の
薪入れ



906あき炭灰同焚
*互換開窓(ノゾリ文化産)
16型向口薪炭不足

昭和0年の家庭燃料(大阪市)
①ガス ②ロークス ③火あき練炭 ④木炭 ⑤炭団
⑥電炭 ⑦無煙炭 ⑧文化炭(ノゾリ) ⑨豆炭 ⑩石油

35成炭マツ
35着火練炭

46貫カド成、石炭入庫箱

70ニューズペーパー製炭(筒形炭)方式

60穴あき筒形炭
*1.5倍前後の燃焼
65穴カライト



*アワトナリ炭料
(杉・ヒノキ・スギ・カシの屑炭)

*製炭、製炭業
設備改善

②液体燃料
ガス・石油

1872横濱でガス専賣開始
85東京瓦斯会社設立
87全面
ガス街総400、屋内7353燈

*ガス炉の普及
*ガス、ライトあるヒートへ
*ガス器具普及の時代
*初期型ガスコンロ
*丸型用はかま

16都市を燃不足ガス化を促す
*陶製
29ガスのパン焼き器

ガスコンロ

52家庭用プロパンガス製用開始
*ガスコンロの普及
*ガスコンロの普及
*ガスコンロの普及

53家庭用プロパンガス製用開始
*ガスコンロの普及
*ガスコンロの普及

56ガスコンロの普及
*ガスコンロの普及
*ガスコンロの普及

57ガスコンロの普及
*ガスコンロの普及
*ガスコンロの普及

③液体燃料
電気、電子
電球

1883東京電燈会社設立
88営業開始183燈

*電球ストーブ
*電球用煤油
*電球用煤油



電球ストーブ

*電球用煤油
*電球用煤油

53電球用煤油
45電球用煤油
*電球用煤油

54電球用煤油
*電球用煤油

55電球用煤油
*電球用煤油

④あかりの姿

油、ロウソク、付木、カンテラ
カマド、イロリのおから
1874電燈ガス灯
1879エジソン、電燈発明
88日本石油設立
91電燈ランプ全盛
石油ランプで夜なべ仕事



115ガソリンランプの普及
13空気が入り電球製造開始

36ガス入
36米、並
38灯

52電球用煤油
49電球用煤油

73灯台
*電球用煤油


74電球用煤油
*電球用煤油

75電球用煤油
*電球用煤油

⑤井戸から水
運へ

井戸、ポンプの時代
1881鹿嶋の水道橋口を橋口といた
*陶製ハンドルの蛇口

*手押し井戸ポンプの時代
*電動井戸ポンプの普及
*電動井戸ポンプの普及



30圧素液面測定
*井戸あとに水栓
*流しに水栓

52井戸ポンプの普及
55全日本水道普及率37.7%
*浄水器の普及

53井戸ポンプの普及
*浄水器の普及

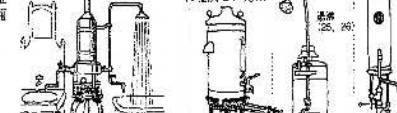
54井戸ポンプの普及
*浄水器の普及

55井戸ポンプの普及
*浄水器の普及

⑥湯のかたから

大釜、湯釜
火鉢、砂鍋
やかん

10電球ビシ発光
*電球ビシの普及



36文化産
*電球ビシの普及

57電球ビシ
*電球ビシの普及

58電球ビシ
*電球ビシの普及

59電球ビシ
*電球ビシの普及

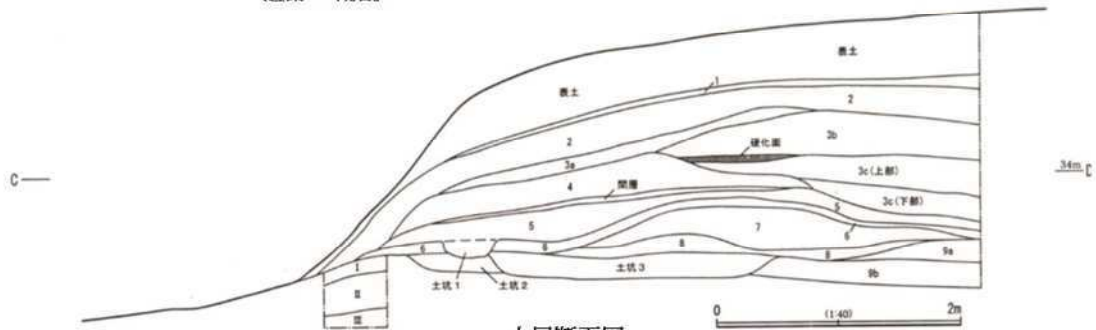
図2 近代の燃料・あかり・水利用
(日本生活学会『台所の100年』より)



遺跡の概観



土層断面



土層断面図

層位	時期	磁器絵付	近世陶磁器	洋食器	明かり	化粧	子ども
表土	戦中～昭和30年代	手描き、型紙摺り、銅版転写、吹き絵、ゴム版絵付、朱点文、スタクリン転写		○	ランプ、火屋、電球、電池、磚子	化粧水瓶、化粧クリーム瓶、樟油瓶	子ども茶碗、人形、プラスチック製玩具、ビー玉、おはじき、ファミコンカセット
1層	戦中	手描き、色絵、型紙摺り、銅版転写、吹き絵、ゴム版絵付			火屋、電球、電池、磚子	化粧水瓶、化粧クリーム瓶	子ども茶碗、ニッキ水瓶、鉄製玩具、ビー玉、おはじき、石蔵り玉
2層	昭和前期	手描き、型紙摺り、銅版転写、吹き絵、ゴム版絵付	○		ランプ、火屋、電球、電池、磚子、笠	化粧クリーム瓶、香	子ども茶碗、ニッキ水瓶、ビー玉、おはじき
3a・b層	大正末～昭和初期	手描き、型紙摺り、銅版転写、吹き絵、ゴム版絵付	○		火屋、磚子、電燈笠	化粧水瓶	子ども茶碗、ニッキ水瓶、ビー玉、おはじき
3c層	大正後期	銅版転写			灯明皿、ランプ、火屋、笠		ニッキ水瓶、おはじき
4層	明治末～大正	手描き、型紙摺り、銅版転写、吹き絵	○		朱燭、灯明皿、明燈皿、灯明皿、細付灯明皿、火屋、笠	鉄製壺、油壺、化粧水瓶、楊	おはじき
5層・土坑1	明治30～40年代	手描き、型紙摺り、銅版転写	○		細付灯明皿、火屋、笠	油壺	子ども茶碗、おはじき、石蔵り玉
6層	明治30～40年代	手描き、型紙摺り	○		火屋、笠		おはじき
7層	明治20～30年代	手描き、型紙摺り、銅版転写	○		灯明皿、細付灯明皿、火屋、笠		
8層	明治20～30年代	手描き			火屋	鉄製環	
土坑2・3	明治20～30年代	手描き、型紙摺り	○		灯明皿	鉄製環	
9層	明治10年代	手描き、型紙摺り	○		火屋		

出土遺物（生活財）



灯火具類



お歯黒道具

図3 三浦市ヤキバの塚遺跡の発掘調査

中世から近世へ ―歴史考古学の課題

五味 文彦 (東京大学 名誉教授)

はじめに

日本の歴史と考古学との関わりを百年ごとの歴史の変化に注目して考える。

遺跡にはどんな意味があるか。考古学というモノの科学と歴史学はどう関わりあうか。

財団法人かながわ考古学財団編『掘り進められた神奈川の遺跡』

一 日本史の時代の流れ

西暦	事象	時代	思潮
1 五七	倭奴国、漢に朝貢	弥生時代後期	王と国
2 二六六	倭の女王、晋に使者派遣	古墳時代前期	
3 三六九	百濟、七支刀を倭に送る	古墳時代中期	統合
4 四七七	倭の武王、宋に朝貢	古墳時代後期	文明化
5 五七二	敏達天皇即位	飛鳥時代	
II 古代			
6 六六七	天智称制	律令制	制度化
7 七六七	道鏡政権	律令体制の変容	習合
8 八六六	摂政藤原良房	摂関時代	開発
9 九六九	摂政藤原実忠	後期摂関政治	風景
iii 中世			
10 一〇六八	後三条天皇即位	院政時代	家
11 一一六七	平清盛太政大臣	武家政権の始まり	身体
12 一二六八	蒙古の国書到来	東アジア世界の流動	職能
13 一三六八	応安の半済令	公武一統	型
iv 近世			
14 一四六七	応仁の乱の開始	戦国時代	自立と自律
15 一五六八	織田信長の上洛	全国統一政権	所帯
16 一六六七	寛文印知	幕藩制国家の確立	制度
17 一七六七	田沼政治の展開	近代への胎動	世界
v 近代			
18 一八六八	明治維新	近代国家の展開	国民

東アジアの動きと相関関係があること。

百年の区切りに時代の思潮の転換があること。

二 神奈川県域の動向

II 古代

原型

- 6 六六七 天智称制 律令制 制度化
武蔵国府と相模国府、国分寺、東海道、瓦窯跡（乗越遺跡とからさわ遺跡）
- 7 七六七 道鏡政権 律令体制の変容 習合
橋樹郡家と都筑郡家、久良岐郡家、鎌倉郡家、高座郡家、足下郡家など
郡家の郡寺、橋樹郡家と影向寺、高座郡家と七堂伽藍、足下郡家と千代廃寺
- 8 八六六 摂政藤原良房 摂関時代 開発
集落遺跡（八世紀から十世紀後半）

秦野市の下大槻峯遺跡・尾尻西館遺跡、厚木市の御屋敷添遺跡、海老名市の大谷向原遺跡、
厚木市の愛名宮地遺跡、葉山町の三ヶ岡遺跡、藤沢市の南鍛冶山遺跡、辻子市の池子遺跡、
平塚市の真田・北金目遺跡群、横浜市西区の西ノ谷遺跡、綾瀬市の宮久保遺跡
木簡や火葬墓、蔵骨器

- 9 九六九 摂政藤原実忠 後期摂関政治 風景
遺跡空白の時代

iii 中世

変容・拠点

- 10 一〇六八 後三条天皇即位 院政時代 家
荘園と公領 寺院と仏像 鎌倉の杉本寺
経塚
一宮・鶴岡八幡宮
- 11 一一六七 平清盛太政大臣 武家政権の始まり 身体
武士の館と寺 大倉御所と寿福寺、永福寺、勝長寿院、
鎌倉中、今小路周辺遺跡、若宮大路周辺遺跡、杉本寺周辺遺跡
相模府中、相模川橋脚
宋銭と国産陶磁器、土器
市と宿
『一遍聖絵』の描く社会

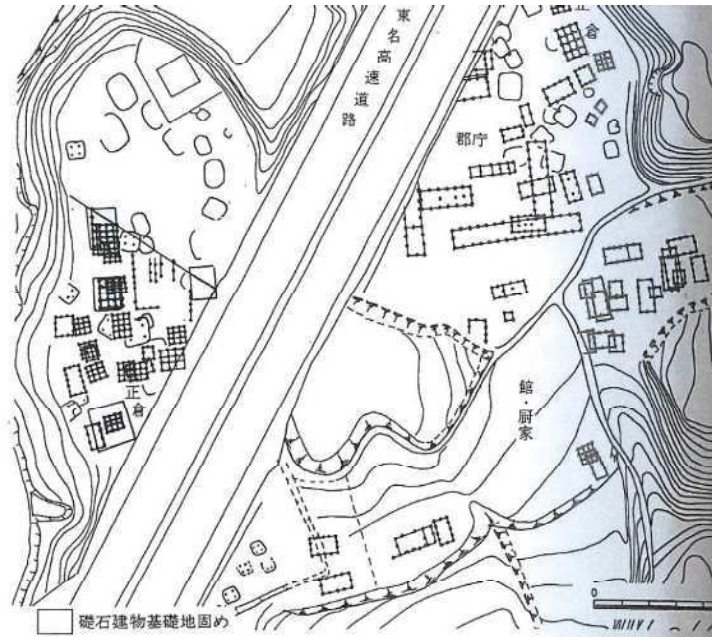
- 12 一二六八 蒙古の国書到来 東アジア世界の流動 職能
禅宗寺院（建長寺以下の五山、東禅寺、東勝寺など）・律寺（極楽寺）
石造物 五輪塔・宝篋印塔・板碑、鎌倉のやぐら
庭園 称名寺の庭園、鎌倉の禅宗寺院庭園、
鎌倉道、
輸入陶磁器
由比ヶ浜南遺跡

- 13 一三六八 応安の半済令 公武一統 型
町場の広がり 茅ヶ崎市上ノ町遺跡、伊勢原市上粕屋・厩引北遺跡
湊町 六浦・神奈川湊
城跡 茅ヶ崎城、早川城
『庭訓往来』の例示する館・町・庭園・建築
iv 近世 実体・体制
- 14 一四六七 応仁の乱の開始 戦国時代 自立と自律
城館と城下町 小田原城、玉縄城、津久井城、河村城、小机城、丸山城
山岳寺院 (大山)
箱根湯本の湯
- 15 一五六八 織田信長の上洛 全国統一政権 所帯
小田原城
早川石丁場群
東海道の整備 箱根の関所、箱根旧街道の石畳・杉並木、畑宿の一里塚
矢倉沢往還 厚木市二番遺跡
- 16 一六六七 東・西回り海運の完成 近世社会の成熟 制度
東海道の宿場町
宝永の富士山噴火 砂ふり
大名庭園
- 17 一七六七 田沼政治の展開 近代国家の胎動 世界
新編相模国風土記稿
新編武蔵風土記稿
村の世界 相模原市根小屋根本遺跡
町の世界
本草学から考古学・民俗学へ
古民家

三 図版

- 【A】 都筑郡家の復元想定図
- 【B】 一遍聖絵 筑前の武士の館
- 【C】 称名寺境内絵図

[A]



都筑郡家想定復元模型

長者原遺跡の発掘成果をもとに、8世紀はじめごろの様相を復元したものです。中央やや上の建物群が「郡庁」、その右下が「厨」、中央手前の横に並ぶ建物が「館」、左側の2列に並ぶ建物群が「正倉」です。

【A】 都筑群家の復元想定図

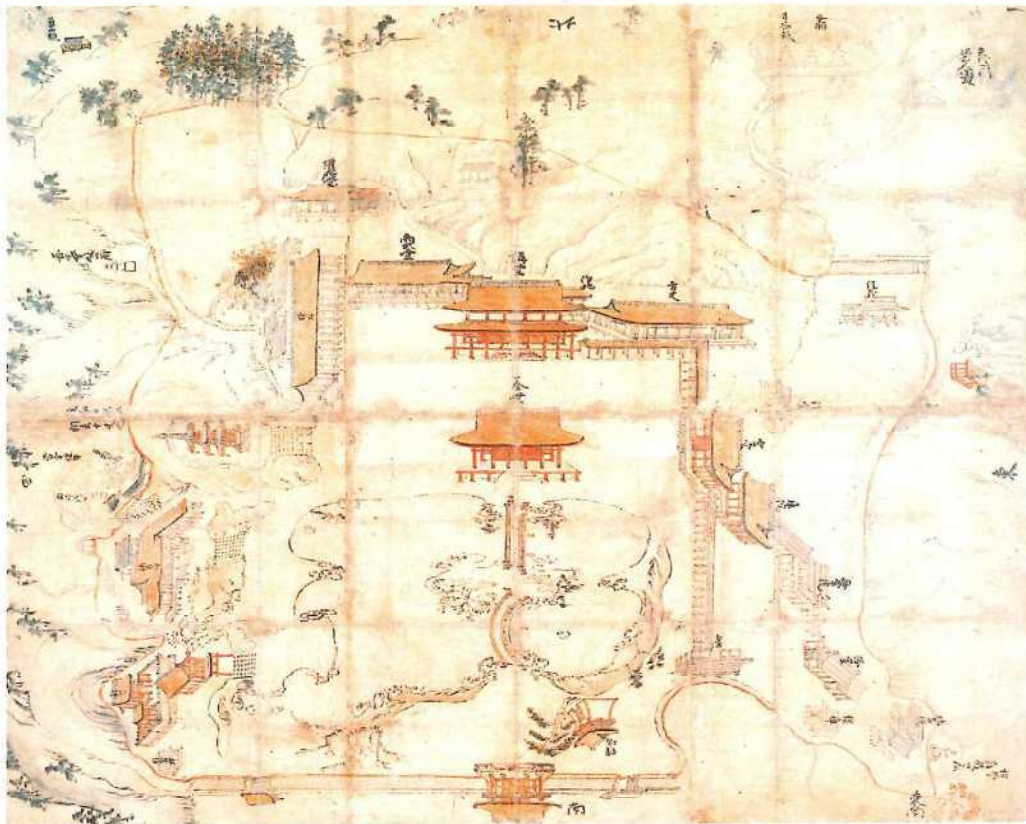
[B] (武士の館)



浄土宗遊行寺、圓光、絹本着色、全二巻のうち四巻一巻、縦三八二釐、鎌倉時代（二九九〇）、法眼田原景

【B】一遍聖絵 筑前の武士の館

[C]



称名寺絵図 (91.0×95.0)

【C】称名寺境内絵図

古墳の終焉と古代の始まり

青木 敬 (國學院大学 准教授)

はじめに

1. 墳墓の変容

- ・前方後円墳の消滅…続く墳丘高大化(墳丘は長さから高さ重視へ)【第1の画期】(白石太一郎)
- ・八角墳の出現…宮都とその周辺における墳墓格式の明確化 【第2の画期】(白石)
- ・「死」に焦点を絞った墳墓…埴輪の消失や埋葬施設・副葬品などの変化
- ・武蔵府中熊野神社古墳(東京都府中市、上円下方墳)…従来の円墳+一辺長が明瞭な方墳の論理
→吉備池麿寺(百濟大寺)金堂と類似した掘込地業が存在(筆者のいうC類)、かつ掘込地業を設けなくとも安定的に古墳が構築できる地形にもかかわらず掘込地業を設ける
→帰郷型(菱田哲郎)か…舒明朝・皇極朝頃の寺院・宮殿の造作に従事

2. 土器の変容

- ・律令的土器様式(西弘海)…金属器模倣、大陸・半島の食事作法・様式の導入、互換性
- ・技術の簡略化にともなう生産の拡大、工人の移動(美濃須衛窯から南比企窯へ)
- ・平底食器の増大…土師器杯A→武蔵型盤状杯などの宮都の食器を模倣した器種の出現
相次ぐ都城の造営事業に徴発された人びとが持ち帰る(松村恵司1995「古代東国集落の様相」)
丸底食器減少、ただし客体的(渡辺一2006『古代東国の窯業生産の研究』)

3. 官衙の成立

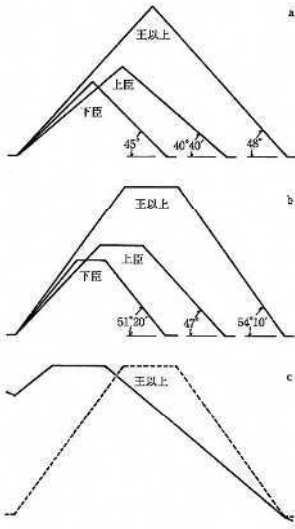
- ・水上交通から馬を利用した陸上交通へ(内山敏行)
- ・評衙(郡衙)の機能…徴税・行政・儀礼・給食・祭祀・生産・交通など(佐藤信2007『古代の地方官衙と社会』)
- ・古墳時代の有力者居宅から官衙へ…各施設の分離・独立から集約、固定化へ(青木敬2014「中央官衙」)
居宅は短期間…各地の支配者層も歴代遷宮と同様か
- ・初期国庁(大橋泰夫2011「古代国府の成立をめぐる研究」)…藤原宮をモデルに、定型化国庁は平城宮をモデルに(青木敬2012「宮都と国府の成立」)

4. 陶硯の世界

- ・飛鳥時代…格式未分化
- ・奈良時代…格式の成立(蹄脚円面硯を頂点とする、朝堂周辺の出土状況)
- ・転用硯、杯蓋硯…各官衙の部門を復元するのに有効

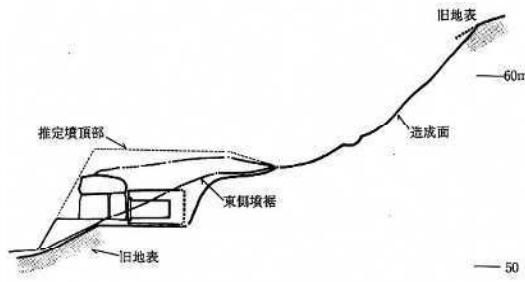
おわりに

紙幅の都合上、引用文献は割愛した。ご寛恕を乞う次第である。



第1図 『帯葬令』の規格に従った墳丘斜面の傾斜角
 a 平地に尖頭型の墳丘を築いた場合
 b 平地に数段方錐型の墳丘を築いた場合
 (頂上平坦面の幅は、基底部の幅の2割)
 c 王以上の墓を平地に築いた場合(破紙)と傾斜面に築いた場合(実線)との比較

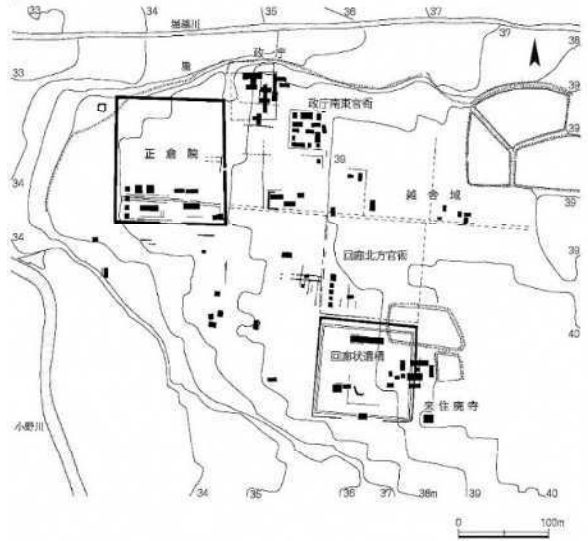
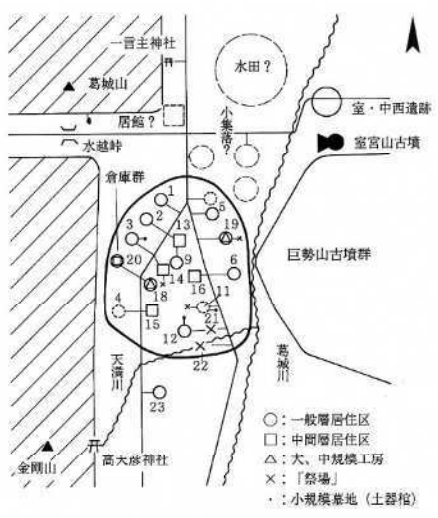
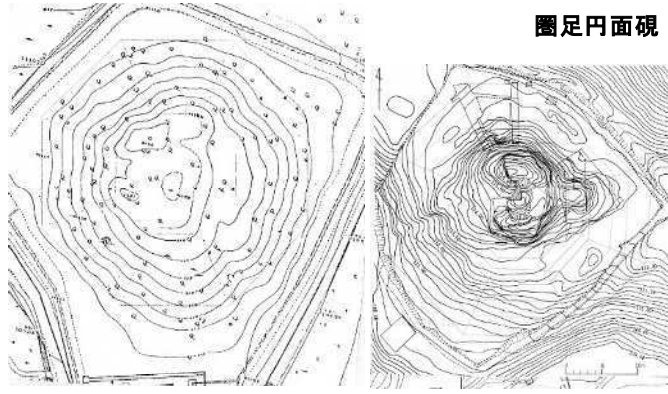
野口王墓古墳(左)
 と中尾山古墳(右)



第3図 大分・古宮古墳断面復原想定図
 (大分市教育委員会『古宮古墳』より)



転用碗(手前)と
 圈足円面碗(奥)

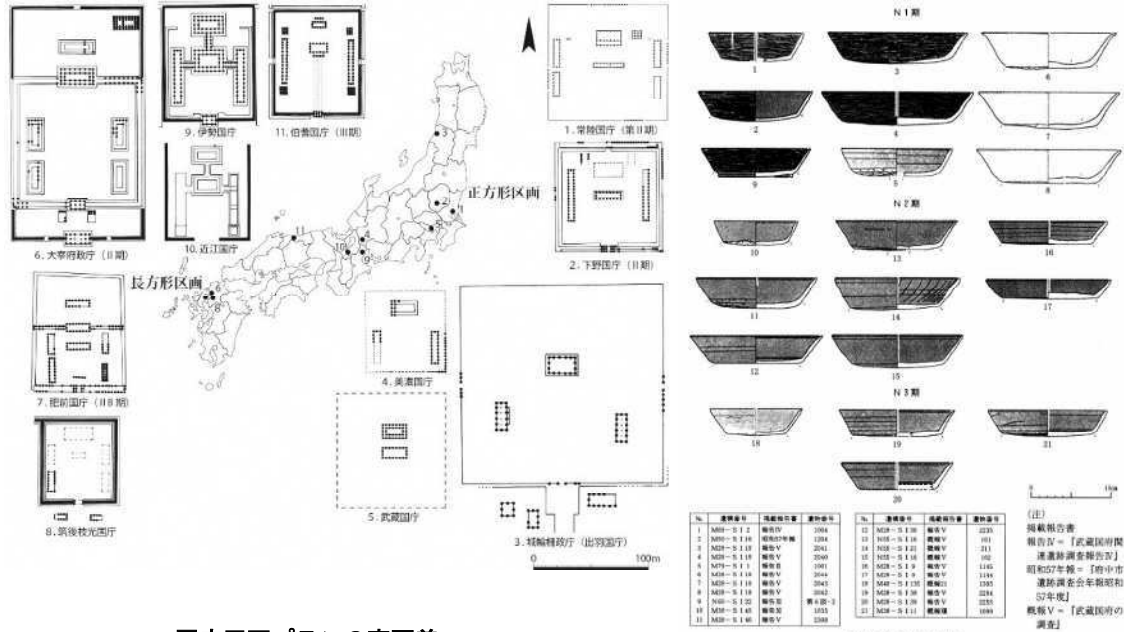


【左上】奈良県南郷遺跡群の模式図
 (奈良県立橿原考古学研究所 2003『南郷遺跡群Ⅲ』)

【右上】愛媛県久米官衙遺跡群
 (松山市教育委員会 2009『久米高畑遺跡』)



【左】岐阜県弥勒寺官衙遺跡群
 (関市教育委員会 2007『弥勒寺西遺跡』)



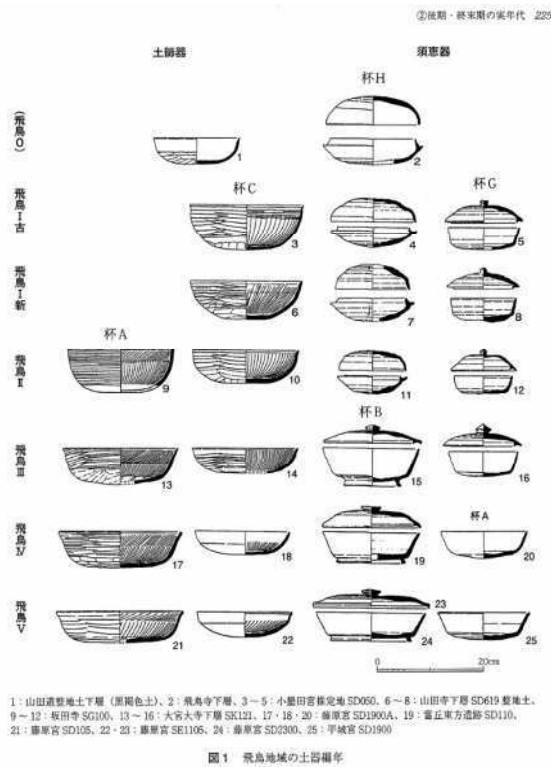
国庁平面プランの東西差

(青木敬 2012 「宮都と国府の成立」『古代文化』63-4)

第44図 盤状杯実測図

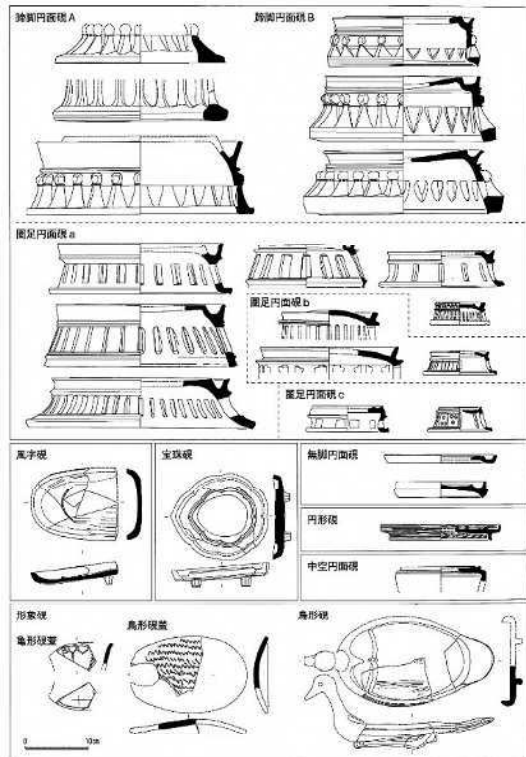
武蔵型盤状杯

(江口桂 2006 『古代武蔵国府の成立と展開』)



飛鳥時代の土器編年

(菱田哲郎 2011 「後期・終末期の実年代」『古墳時代の考古学1』古墳時代史の枠組み)



陶碗の諸型式

(奈良文化財研究所 2006 『平城京出土陶碗I』)

旧石器時代から縄文時代へ —はじめて土器を手にした人たち—

藤山 龍造 (明治大学 准教授)

旧石器時代と縄文時代の境界をどこに求めるか

時代の推移はときに緩やかであるため、その境界をどこに求めるのか、常に論議的になる。旧来、“縄文時代のはじまり”は往々にして土器の誕生と背中合わせに考えられてきた。一方で、土器の誕生が当初の想定以上に古く遡るなかで、特定の資料を指標とすることの是非が問われるなど、まだまだ唯一無二の定義に落ち着いているわけではない。何らかの物質的な指標に基づいて時代を区分するのか、あるいは社会的な変化に基づいて区分するのか、依然として悩ましい問題が残されている。

このような問題が残されるにせよ、旧石器時代が終焉を迎え、縄文時代へと至る過程には、かねてより深い関心が寄せられてきた。そうした取り組みにあたって、神奈川県内に点在する遺跡は戦前から大きな役割を果たしてきた。とりわけ、ここ40年間の濃密な調査は縄文土器の“底”をほぼ確定させると同時に、最古の土器を生み出した人々の生活を鮮明に物語ることになった。旧石器時代から縄文時代への推移を考えるにあたって、この地域には全国的に見ても第一級の資料群が残されている。

旧石器時代と縄文時代の端境期に何が起きたか

旧石器時代と縄文時代の端境期には、その後の社会を特徴づける幾多の資料が出現するため、その過程が象徴的に描き出されてきた。土器の誕生はその一端であるが、これらは1.6万年前まで遡るなど、世界的に見ても最古級の土器群である。かつて土器の誕生は農耕社会の誕生と関連付けて理解されたが、今日では中緯度～高緯度地域を中心に古相の土器が狩猟採集社会のなかで誕生する点が注目されている。こうした文脈において、日本列島における土器の誕生は国際的な関心の的に他ならない。

無論、土器の誕生ばかりが“縄文時代のはじまり”を特徴付けるわけではない。それに前後して狩猟具の中心が槍から弓矢へと変化する点、植物質食糧の加工具が普及してゆく点は長らく注目されてきた(第2図)。これに後続して夏島貝塚に象徴される貝塚が出現するほか、次第に鮮明な竪穴住居が残されるようになってゆくなど、しばしば定着的な生活への推移が物語られるわけである。

土器の誕生を含めて、これらは更新世から完新世に至る自然環境の変化と結び付けられ理解されることが通例である。

近年、県内の濃密な資料群に基づき、こうした諸現象に通底する変化のメカニズムが鮮明にされつつある。旧石器時代に特徴的な次々と居住地を移転してゆく生活はなりを潜め、特定の小範囲に生活拠点の形成が進んでゆくが、これは竪穴住居の普及に先んじて進んでいた可能性が高い。狩猟採集生活を基本とする点では変わらないが、当時の狩猟採集民は資源を追い求めて居住地を移転するのではなく、むしろ生活の中心地を起点に資源を寄せ集めるなど、周囲の自然と異質な関係を取り結び始める。

こうした現象は段階的に進んでゆくが、これまで注目されてきた諸々の現象はまったく無関係に進んだのではなく、上述した資源開発の変質と背中合わせの関係にあったと見込まれる。石器群の構成が大きく変容する点はもちろん、石器作りの仕組み自体が再編される点すら、上記の変質と密接に関係している。小範囲に重点を置いた資源開発は竪穴住居の普及に先行して展開しており、その延長線上に定住集落の形成、さらには貝塚遺跡や洞穴遺跡の展開を見通すことが出来る。

世界最古級の土器群はいかに誕生したか

すでに述べたように、日本列島の土器群は世界的に見ても最古級の土器群である点に疑いの余地はない。しばしば青森県・大平山元 I 遺跡の土器群が象徴的に取り上げられるが、神奈川県内でも寺尾遺跡、相模野 No. 149 遺跡など、それに近い時期の土器群が点在している（第 3 図）。しばしば指摘されるように、それらは 1.6 万年前に遡るなど、旧石器時代に準ずる寒冷期に誕生している以上、かつて漠然と想定されたように地球環境の温暖化と一対一に結び付けて理解することは困難な状況にある。

このことを示唆するように、これらの土器群には投槍や弓矢はともなっておらず、むしろ旧石器時代と大差ない槍猟を基本としていたと考えられる（第 3 図）。それらの石器群の分析を進めてみると、当時の人々は居住地を次々と移転するそれ以前の生活を踏襲しており、この意味でも旧石器時代に準ずる生活のなかで土器が誕生したことは間違いない。かつては定着的な生活と土器の導入が密接な関係にあると予測されたが、むしろ日本列島の最古の土器群は Nomadic Potter の典型と考えて良い。

となると必然的に問題となるのが、土器が誕生した背景である。かつてのように即座に温暖化を想定できない以上、漠然と想定されてきた植物質食糧の加工といった言説が踏襲できない点は、すでに広く共有されている。その一方で、土器の用途を明確に物語る情報は限られてきたが、近年では土器付着物の理化学的な分析を通じて水産資源の利用が示唆されるなど、新たな情報源として大きな関心が寄せられている（第 4 図）。ひとつの選択肢として一考に値することは間違いあるまい。

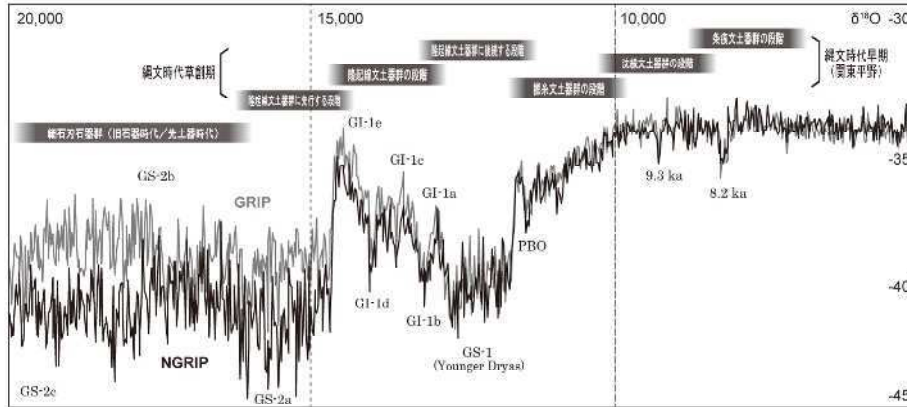
ただし、現状では考古学的な分析成果と理化学的な分析成果には齟齬があることも事実である。なかでも土器の普及はしばしば磨石や石皿の普及と連動するなど、植物質食糧の加工と結び付いて

いた可能性は捨てきれない状況にある。このことは考古学的な分析と理化学的な分析のいずれか、あるいは双方に何らかの誤りがある可能性を示唆している。現時点では明確な結論を与えることは困難であるにしても、こうした齟齬を埋めてゆく作業にこそブレイクスルーが見出されるはずである。

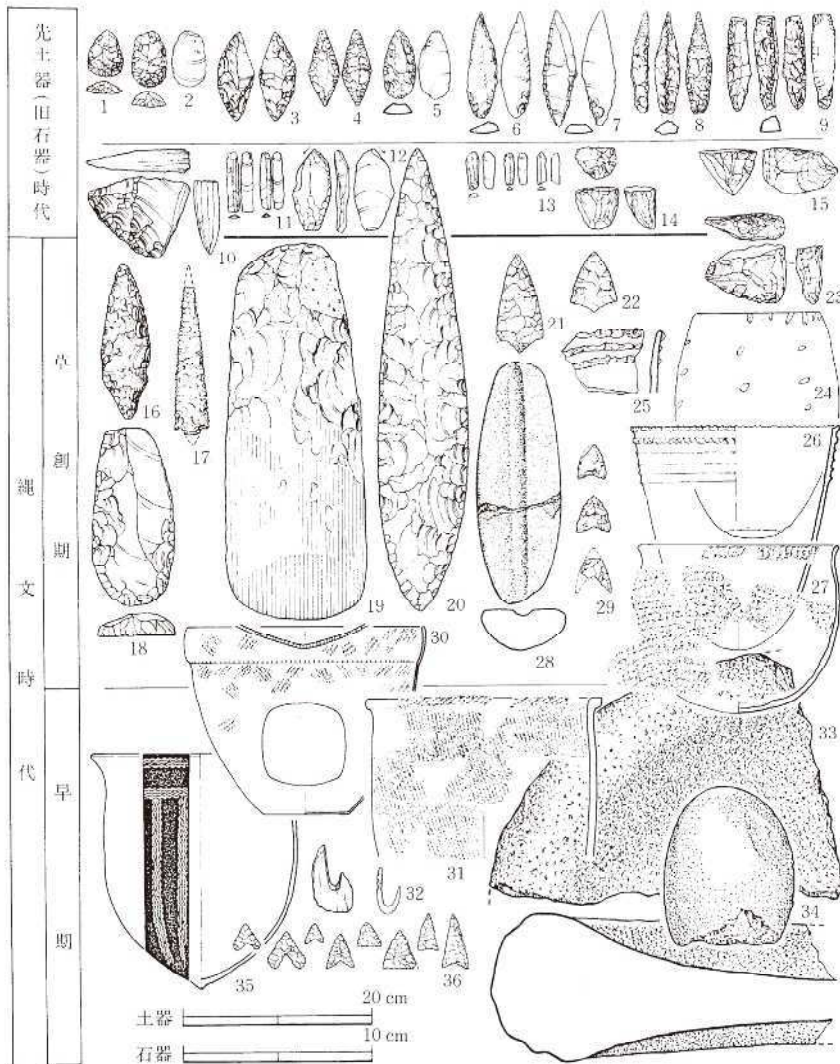
古環境の変化をどう考えるか

旧石器時代から縄文時代への推移をめぐって、それが更新世から完新世への推移と背中合わせの関係にある点は、これまで予測されてきた通りである。近年では、古気候学の進展を背景として、この期間の気候変動がより高い解像度で把握されるようになっている。それらの成果と照らし合わせる限り、上述した資源開発の再編を基軸とした諸変化が地球環境の温暖化と歩みを共にしている点は十分に予測される。これは洞穴遺跡などで得られた動物遺体や植物遺体の分析結果とも調和的である。

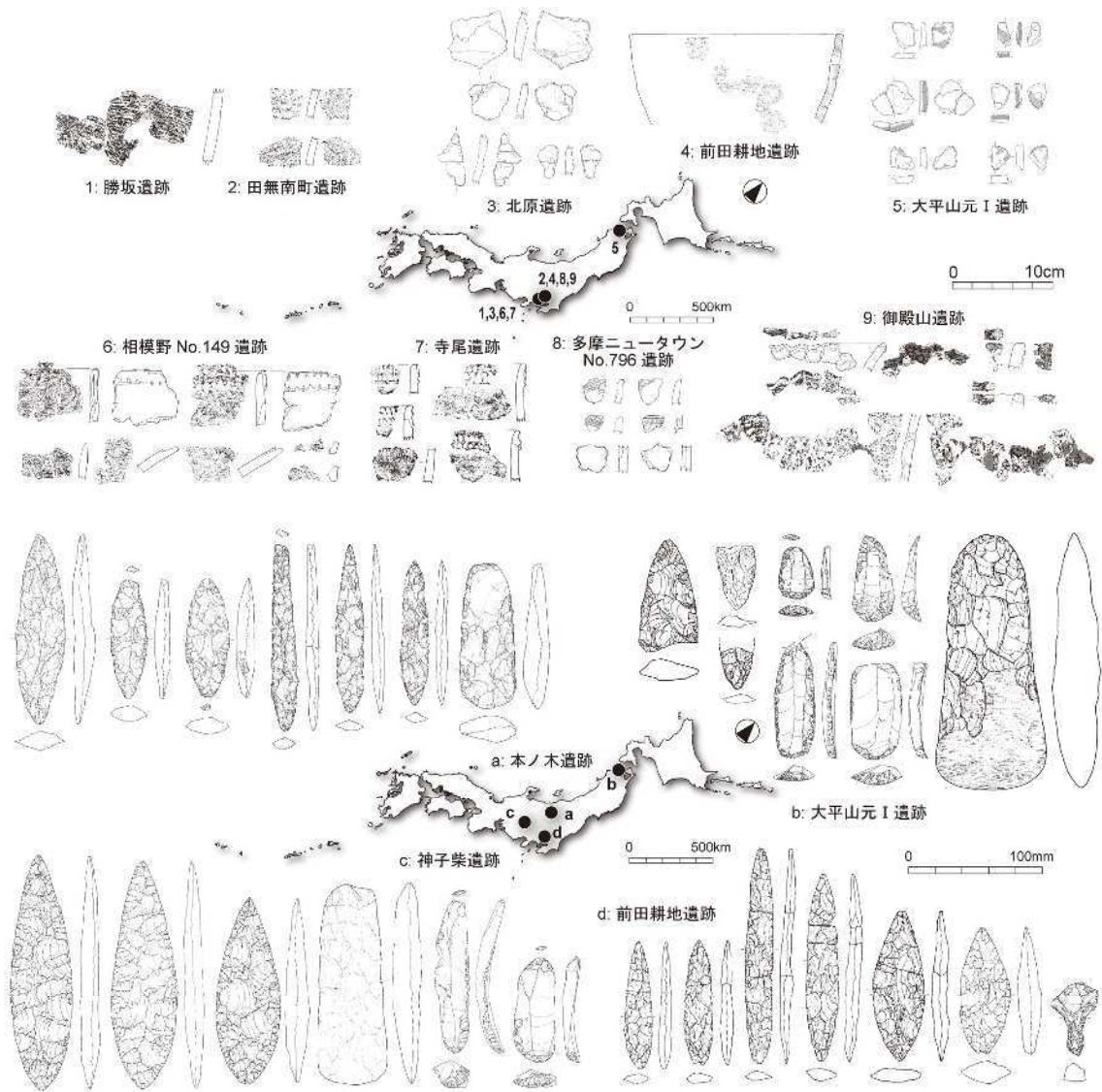
一方で、世界各地で議論される“寒の戻り”（ヤンガードライアス期）とその影響をめぐっては、依然として情報の蓄積が必要である。その存在を示唆する情報は一部に認められるが、今もって明確な証左が限られており、それに呼応した考古学的現象も確実とは言い難い。たしかに、この時期には県内の遺跡が著しく減少する傾向が見られるため、それが上記の気候変化と結びつく可能性は否定しきれない。早急な結論は慎んだ上で、着実に人間活動への影響の有無を見定めてゆく必要がある。



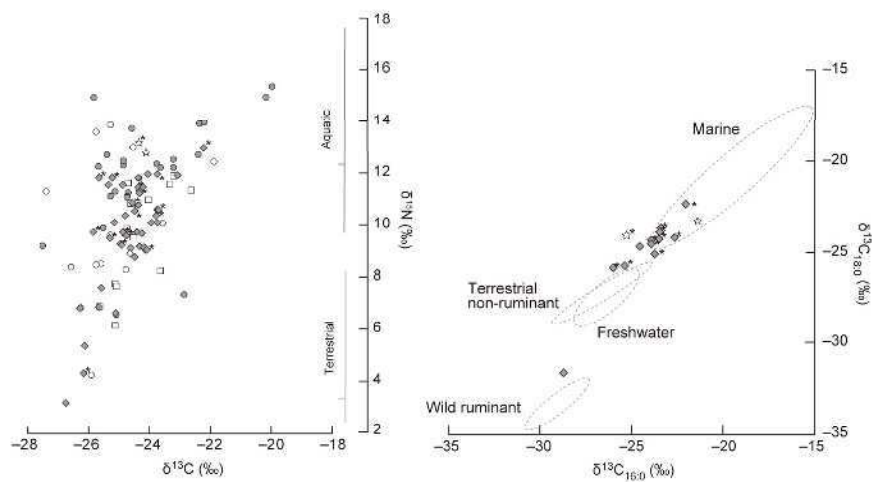
第1図 更新世から完新世への気候変化と考古資料の年代的位置づけ (藤山 2014)



第2図 稲田孝司 (1986) が整理した縄文時代の考古資料とその消長



第3図 最古級の土器群（上段）と関連する石器群（下段）（各報告書より抜粋）



第4図 土器付着物の解析結果（Craig et al. 2013 より抜粋）

弥生時代の終わりと古墳時代の始まり

田中 裕 (茨城大学 教授)

1. 時代の変革期をどう考えてきたか

(1) 世界では過去の「社会」をどうみたか

- ・マルクス主義(唯物史観)的見解
- ・人類史の三革命—V.G.チャイルド—

「新石器革命」 Neolithic Revolution

1万2千年前 旧石器時代と新石器時代の間
農耕・牧畜による食糧生産革命

「都市革命」 Urban Revolution

5千年前 都市=初期文明⇔国家の成立
余剰生産による知的従事者(エリート)の創出

「産業革命」 Industrial Revolution

近代の始まり

(2) 日本では列島の国家形成への変化をどう説明してきたか

- ・国家形成期としての弥生時代から古墳時代
- ・唯物史観による内的発展論(社会の階層化と階級の固定化の過程)
- ・チャイルドの余剰生産論と日本の米中心史観の合体
弥生時代からの水田稲作による生産力を高く評価する歴史観
階層分化と墳墓の格差
- ・小林行雄「古墳の発生」と近藤義郎「前方後円墳の時代」の見方
文化伝播論が非常に強かった時期に「古墳の政治性」を明らかにした研究
ともに古墳を政治的産物と見るが、後者は内的社会発展の論理が明確

2. 社会の複雑化とシステムの理解へ

(1) 世界では過去の「社会」をどうみているか

- ・E.R.サーヴィス(文化人類学)による社会の「段階」

新進化主義文化人類学による社会の複雑化過程

a 「バンド(遊動的狩猟採集民)社会」 Band

b 「部族社会」 Tribe→「分節社会」 Segmentary Society

c 「首長制社会」 Chiefdom

d 「国家」 State

(クラッセン, スカールニク)

d 1 「初期国家」 Early State d 2 「成熟国家」 State

文明社会の成立は、チャイルド「都市革命」、サーヴィス「国家」の段階。

その前段階に、広域交流を生み出す富（余剰）の蓄積、階層分化した複雑で大きな社会が必要となるとし、既存文明の周辺に生まれる「二次文明」と「初期（一次）文明」を区別（インダス文明は二次）するチャイルドの考え方の発展と一部修正。石器による文明（マヤ）、無文字の文明（インカ）など。現在は、文明社会の解体、複雑化の解消も容認。

• C.レンフルーによる交換・交流の分類

a 「直接獲得」 Direct Access

b 「互酬（居住地型）」 Reciprocity (Home Base)

c 「互酬（境界型）」 Reciprocity (Boundary)

d 「互酬連鎖交換」 Down-the-line Trade

e 「中心地再分配」 Central Place Redistribution

f 「中心地市場交換」 Central Place Market Exchange

g 「フリーランス（仲介者）交易」 Freelance (Middleman) Trading

h 「使者交易」 Emssary Trading

i 「租界交易」 Colonial Enclave

j 「交易港交易」 Port of Trade

余剰生産物がもたらす相互作用としての交易。システムとしての理解へ。

(2) 列島の国家形成への論点がどう変化したか

• 七五三論争

• 都出比呂志「前方後円墳体制」論

初期国家論と古墳時代の内的発展論を統合させた考え方

古墳の政治性「古墳の形は出自を表し、大きさは実力を表す」古墳と身分

交通と鉄

• 北條芳隆「前方後円墳（秩序）の論理」（秩序を付けたのは田中）

3. 土器の変化をどう考えるか—弥生土器と土師器—

(1) 弥生時代後期の土器と様式圏

• 狭い範囲で特徴が異なる土器

• 列島の東西で土器圏が狭い

きわめて小地域が顕在化、他地域との交流は少ないか

→すでに石斧等は消滅、木工を含めて、鉄器に依存する社会

→内的発展論では説明しにくい現象

(2) 古墳時代前期の土器と様式圏

- ・小型土器群（とくに小型器台と小型丸底鉢）の共有
 - ・西日本の丸底化（とくに丸底甕の普及・定着）
 - ・東日本の様式圏広域化とモザイク状分布（とくに平底甕・台付甕の定着）
- 政治的統一が土器を斉一化させるのか

(3) 土器と社会・政治

- ・土器に政治は反映するか
 - ・生活道具と祭祀道具
- 少なくとも文化の大きな要素、社会の基底に位置
祭祀の動機や仕組みにより政治的産物でありうる

4. 古墳出現前夜の「大交流」—「邪馬台国論争」と3世紀の列島—

(1) 「邪馬台国論争」とは

- ・邪馬台国の位置論に終始している（九州説、近畿説、その他説）
- ・位置論の意味（そもそも重要か）

(2) 「邪馬台国」に関する「史料」の基礎的知識—史料批判の基礎—

- ・原典は「魏志倭人伝」という書物ではない
- ・「魏志倭人伝」では「邪馬台国」とは書いていない
- ・「魏志倭人伝」では「卑弥呼」は「邪馬台国」の女王とは書かれていない

(3) 「邪馬台国論争」の断定的解決の困難さ

- ・「魏志倭人伝」はわずか2000字弱
- ・位置に関する記述はとくに曖昧で少ない

(4) 考古学的事実からみた3世紀前後の列島

- ・青銅器の分布圏と「倭国大乱」

a 銅剣・銅矛文化圏と銅鐸文化圏という構図（和辻哲郎）—2世紀以前

b 環濠（堀で囲まれた）集落 弥生時代の防御性集落—多くは紀元前後

- ・「邪馬台国」の前後—3世紀前半の土器の「大交流」—

a 各地に築かれた多様な「首長」の墓（2世紀後半～3世紀前半）

b 奈良盆地東南部へ集まってきた品々—奈良県桜井市纏向遺跡（3世紀前半）

c そっくりの形につくられた最古の古墳（3世紀中頃～後半）

d 最古の古墳の分布近畿・瀬戸内連合体（3世紀中頃～後半）

- ・考古学的成果では、3世紀の日本列島において、少なくとも近畿・瀬戸内を核とした西日本に、広域の連合体が成立していたと考えられる。

5. 人文環境論と古墳時代の交通環境

(1) 人文環境論の視点

a 景観復原による歴史研究

- ・「水田稲作農耕」一辺倒は不十分ではないか
- ・人間と自然が相互に関係しながら生み出す環境下での「選択」による歴史

b 景観を構成するさまざまな環境要素—環境変化の両輪—

- ・「自然環境」＝地形・気候・土壌・植生・生息動物等の自然要素
- ・「人文環境」＝知識・職能・道具・施設・人脈・人口等の人文要素

c 弥生時代後期から古墳時代前期を特徴付ける人文環境の一例

1)大型家畜の不存在

- ・『魏志倭人伝』の特徴とそこに描かれた3世紀の「倭」の世界
- ・「倭」の習俗—其地無牛馬虎豹羊鵠—
- ・壱岐・原の辻遺跡の出土牛馬骨

2)車輪の不存在

- ・蒲生君平の前方後円墳「宮車」説
- ・三角縁神獣車馬鏡・神人車馬画像鏡の「車馬」
- ・奈良県桜井市小立古墳出土の「車輪」

3)帆船の不存在

- ・弥生時代の絵画土器の「漕舟（櫓漕舟）」表現
- ・古墳時代の舟形埴輪等の「漕舟（櫓漕舟）」表現

4)陸上交通と水上交通の運搬効果に極端な格差を生じた時代

- ・陸上交通の選択肢は徒（人力による担上げ・引摺り）のみ
- ・水上交通は大型漕舟（集団）・小型漕舟（個人）・曳舟（人力）の選択
- ・海流からみた海の世界と陸の世界—分断された西日本と東日本—

5)交通手段の選択肢が限定されることによる仮説

- ・最大限の水上利用

→各種舟の航行限界（幅・緩急の変わり目、合流点、上流限界）の要衝化

- ・最小限の陸上利用

→最小コストをルールとするルート想定が可能

わかりやすいのは・・・「半島ショートカット」・・・海の難所と分水嶺の関係

（交通の量と頻度（速度を含む）が社会のあり方にも影響する）

(交通とは情報・物資・ヒトの移動や接触【遊動、移住、流通、戦争を含む】)

6. 古墳時代前期のヤマト王権と東日本

(1) 「大交流」期(2世紀末～3世紀前半)後の西日本と東日本

- ・土器の違い
 - 壺と甕：丸底の世界(西)と平底(または台付)の世界(東)
 - 祭祀用土器：様々な地域の土器を混ぜて成立(岩崎卓也)
 - ・副葬品群(威信材交換の結果)の違い
 - 三角縁神獣鏡(3世紀後半～4世紀前半) 西方型・東方型
 - 石製腕飾類 鍬形石の東方限界(岐阜県可児市)
 - 玉類 比較的広域性を示すが、ガラス素材が異なるという指摘も
 - ・違いを生み出したのは「身分」の違いか→システム論的に考える必要がある
- (2) 前期巨大古墳の立地—前方後円墳秩序の成立とヤマト王権の拠り所—

- ・「箸墓類型」=最初の定型化(第二群)前方後円(方)墳
- ・奈良盆地東南部、大和川最上流域(溪谷と低地が出会う場所)
- ・列島東西に分断する分水嶺とヤマトの位置

巨大な関東世界にアクセスする物流の二大ルート×三大経由ポイント

- ・二大ルート

①瀬戸内海(九州—山陽—大阪)

②日本海(山陰—北陸)

- ・三大経由ポイント(分水嶺越えのポイント)
 - a 奈良盆地—伊賀越え—伊勢湾南部(大和川—雲出川)
 - b 琵琶湖—不破越え等—伊勢湾北部・濃尾平野
 - c 能登半島横断—善光寺平—碓氷(入山峠)越え等

- ・関東との物流接続の選択肢

ほぼ①—a、①—b、②—b、②—cしかない(但、①—aに木津川迂回路あり)

- ・ヤマト王権の基盤 東日本へのアクセス権(またはアクセス管理権)

課題1 瀬戸内海交通の安定(①の確保、山陽・四国・九州北部ネットワーク構築)

課題2 大阪湾岸諸集団との関係強化(大和川水系が生命線、淀川水系は①—bの調整弁)

課題3 京都府南部木津川中流域の掌握(①—aの木津川迂回路を掌握)

課題4 濃尾平野諸集団との競合関係解消(②—bの競合)

課題1：岡山県浦間茶臼山古墳等の「箸墓類型」前方後円墳、課題2：大阪府玉手山古墳群等の大和川が溪谷から大阪平野に出会う位置に立地の中規模前方後円墳群・京都府元稲荷古墳等の箸墓類型前方後「方」墳、課題3：京都府椿井大塚山古墳にみる箸墓類型前方後円墳と副葬品、課題4は

ホケノ山古墳周溝出土のS字状口縁台付甕

- ・交通のかたち（最大限の水運、積替え、陸越えの連鎖）交通マネジメントと強力集団掌握

（3）前期初頭の東日本—「箸墓類型」が築かれたころ—

- ・前方後方（円）墳（第一群）の世界（前方後円墳秩序の論理が働いていない）
- ・箸墓古墳のころの第二群前方後円（方）墳はみあたらない
- ・ヤマト王権は西日本安定化に腐心していたか
- ・大交流期の直接影響域東限付近にフロンティア発生（千葉・茨城・栃木を縦断する分水嶺付近）
物資供給安定化→急拡大の開始

（4）「定型化」前方後円墳（第二群）が造られるころの東日本

- ・神奈川県逗子市・葉山町長江桜山古墳群がものがたるネットワーク
- a 「半島ショートカット」の典型（前期古墳に特有の「ドン突き」への立地）
平野・盆地の上流側（河川傾斜変換点）や河川合流点（中流域の重要性）
- b 壺形埴輪等からみたネットワークの特徴
飛石的で数珠つなぎの緩やかなネットワーク（「伝言ゲーム」的様相）
東西に長く形成された複数ネットワークの交錯（組み合わない壺形と器台形）
「関東」や「東国」としてのまとまりをもつわけではない
- ・東北へのフロンティア拡大（ほぼ限界）
- ・東海の影響小、近畿の影響増加（間接的）
- ・木曾川流域ミニフロンティア 陸上奥地（とくにシナノ）との接触

7. フロンティアの発生と拡大

（1）フロンティアとは

- ・強い意欲が伴う巨大な社会と小さな社会との異文化接触の前線
文明がもつ欲望の刺激性・増殖性により発生（緊張関係を伴う友好的・非友好的交通）
巨大なネットワークにつながる優位性を利用すれば、誰でも参画可能
（領土国家【土地所有】の概念により変質化）

（2）フロンティアの発生

- ・大交流期の直接影響域東限付近＝北関東系弥生土器（縄文多様土器群）との分布境界
物資供給安定化→フロンティア発生（千葉・茨城・栃木を縦断する分水嶺付近）
- ・方形堀囲施設（「豪族居館」）の分布（分水嶺の北東側に集中）
- ・北上をはじめる房総様式土器の成立場所（フロンティア発生源）
北限：千葉県柏市一番割遺跡・戸張城山遺跡・呼塚遺跡＝最古級方形堀集落
南限：千葉県富津市付近か
- ・方形堀囲施設の異系統土器一括投棄

奈良県桜井市纏向遺跡と同様に異系統の土器を一緒に投棄(房総様式と十王台式土器の混在など) 房総様式などの土師器は、とくに祭祀用具を中心に、器種毎に異系統の特徴が取り込まれている (例：北陸系装飾器台・東海系小型器台など)

ヤマト王権が創出した交換取引の際の信用創出儀礼の論理を模倣か

方形堀囲施設は商館(トレードセンター)のような施設か

相互の信用を創出するための祭祀・儀礼と巨大ネットワークの存在を証明するモニュメントとしての古墳がフロンティア拡大を加速

(3) フロンティアの拡大(巨大社会からみた「拡大」)

・第1次拡大域(房総様式の忠実品) = 茨城県

・第2次拡大域(房総様式の非忠実模倣品) = 栃木県・福島県

那珂川町鹿島前遺跡は茨城県産の房総様式土器か(津野氏指摘) = 時間差小さい玉突き

・第3次拡大域(房総様式の古要素残存変容品) = 宮城県

栗原市入ノ沢遺跡・伊治城跡の輪積甕(房総南部の古い特徴)

前期後葉(ほぼ限界：最大分布は中期前半の岩手県角塚古墳)

8. まとめ

弥生時代から古墳時代の変革は、古墳の築造によって一定の身分秩序のもと統一的な政治的組織の形成をみようとしているが、列島の東西では、状況が大きく異なっている。広域的に西日本で受容される土器諸器種の丸底化は、西日本諸集団の社会的結びつきが、かなり濃密で直接的であったことをものがたる。ヤマト王権は東西の違いをもっとも理解する位置にあって、東日本へのアクセス権を独占的に握ることにより、西日本諸集団が持ち得ない経済的基盤というわずかな優位性を活かし、大幅な譲歩を伴いながら、鉄素材等必需物資の入手を支える、瀬戸内海交通の安定化に腐心したと考える。

これに対し、東日本のネットワークは、伝言ゲームのように飛び石的で交錯する、間接的な複数の線に頼っていた。モザイク状土器圏もこれを裏付ける。東日本諸集団の強い社会的関心事となっていた交通(とくに水上交通)確保について、王権が西日本への窓口を一手に担うとしても、ネットワーク自体が不均衡とはいえ互恵的な関係の連続であったならば、王権の統制が直接的に及ぶ仕組みではない。急激に安定化し活性化してくる巨大交通ネットワークの先端につらなった東関東の集団は、分水嶺による文化的障壁を容易に越えうる量の物資が入手可能になったこと自体により、異文化接触の利権を獲得し、利権を最大化・具体化させようと、独自に活発な活動を行うことができたとしても不思議はない。これが、東北地方を含む列島東縁に、大きな変革をもたらした原動力と考える。

【参考文献】

- 岩崎卓也 1991 「土師器 国家形成期の土器」『アジアと土器の世界』雄山閣出版
- 小林行雄 1955 「古墳の発生の歴史的意義」『史林』38-1 (小林行雄 1961『古墳時代の研究』青木書店所収)
- 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店
- サーヴィス,E.R 1971, *Primitive Social Organization. An Evolutionary Perspective (2nded.)* , 211pp., Random House:New York
- 田中 裕 2011 「前方後方墳の歴史性」『古墳時代の考古学 3 墳墓構造と葬送祭祀』雄山閣
- 田中裕 2012 「古墳と水上交通—茨城県域及とその周辺及び「畿内」の古墳立地を比較して—」『東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』第 17 回東北・関東前方後円墳研究会大会シンポジウム発表要旨
- 田中 裕 2013 「古墳における墳丘形式の意義について」『考古学ジャーナル』644
- 田村晃一 2007 「『魏志』倭人伝にみる食べ物」『食べ物の考古学』学生社
- 都出比呂志 1989 「古墳が造られた時代」『古代史復元 6 古墳時代の王と民衆』講談社
- 都出比呂志 1991 「日本古代国家形成論序説-前方後円墳体制論の提唱-」『日本史研究』343
- 都出比呂志 1991 「墳丘の型式」『古墳時代の研究 7 古墳 I 墳丘と内部構造』雄山閣出版
- 中井正幸 2004 「二つの前方後方墳—群構成からみた東海の前方向後方墳—」『古墳時代の政治構造—前方後円墳からのアプローチ—』青木書店
- 西嶋定生 1961 「古墳と大和政権」『岡山史学』第 10 号
- 北條芳隆 1986 「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価—設立当初の畿内と吉備の対比から—」『考古学研究』32-4
- 北條芳隆 2000 「前方後円墳と倭王権」『古墳時代像を見なおす』青木書店
- 和田清吾 1981 「向日市五日原古墳の測量調査より」『王陵の比較研究』京都大学文学部考古学研究室
- レンフルー,C. & バーン,P. ,*Arcaeology. Theories Methods and Practice*, 543pp.,Thams and Hudson:London (池田・常木ほか訳 2007『考古学 理論・方法・実践』東洋書林)

第1図
交通環境（最大水路・最小陸路の原則）

列島における
古墳時代前期の
人文環境

大型家畜 なし

車 なし

帆船 なし

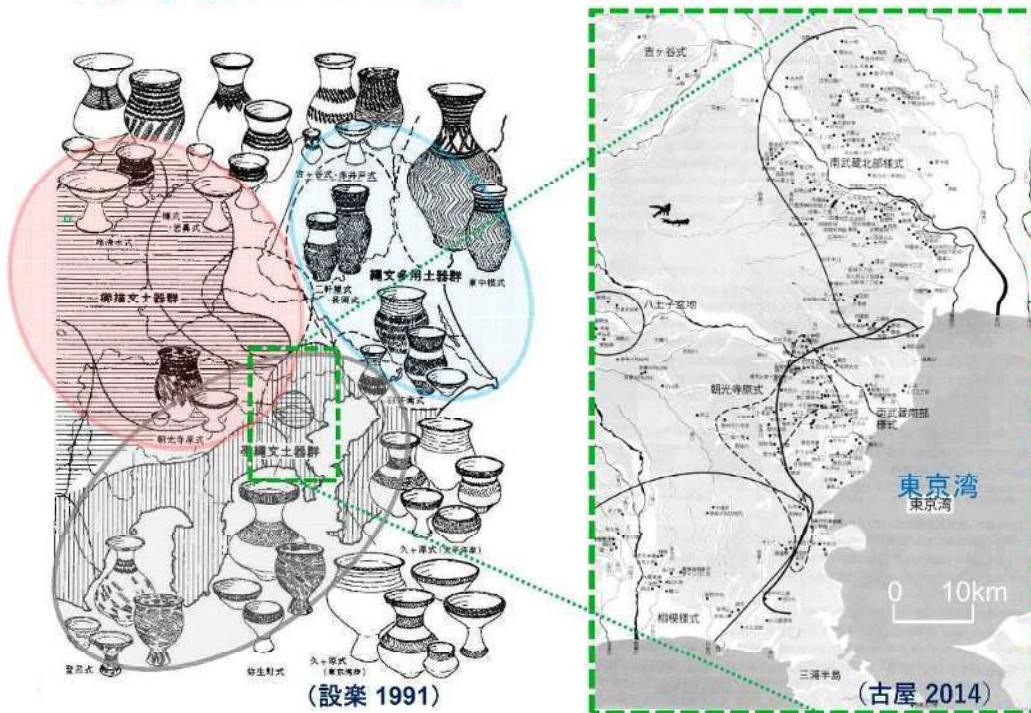
鉄素材など必需品の半島依存



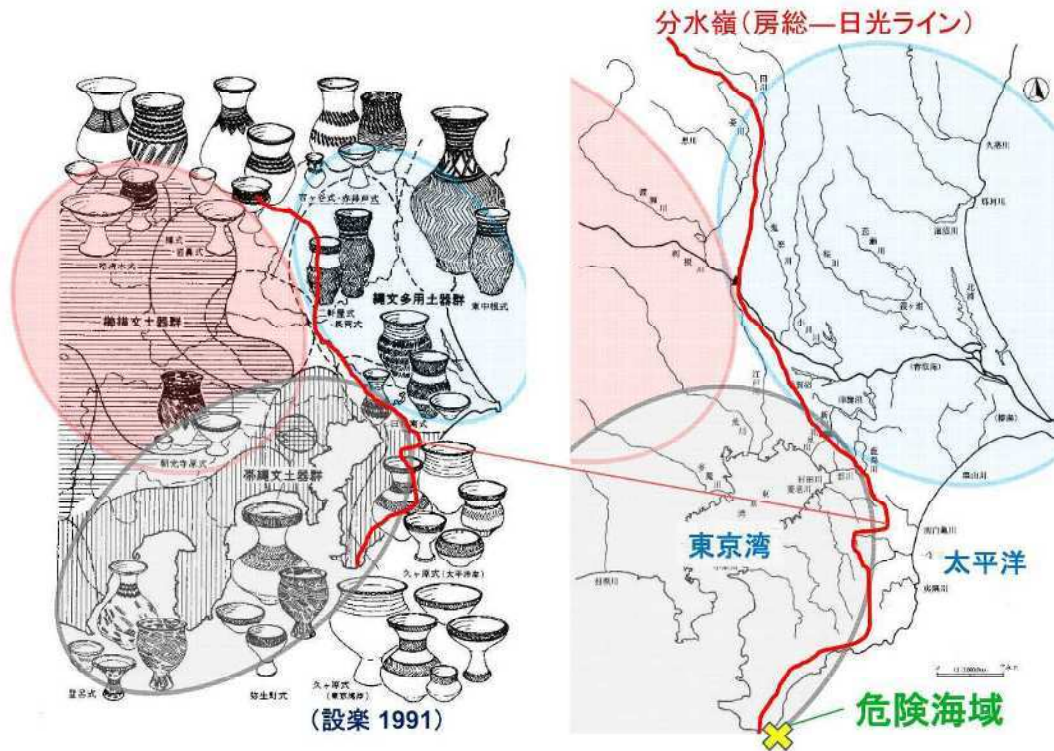
第2図 関東における後期弥生土器の分布圏(2世紀)

大きい分布圏(60—80 km 圏)

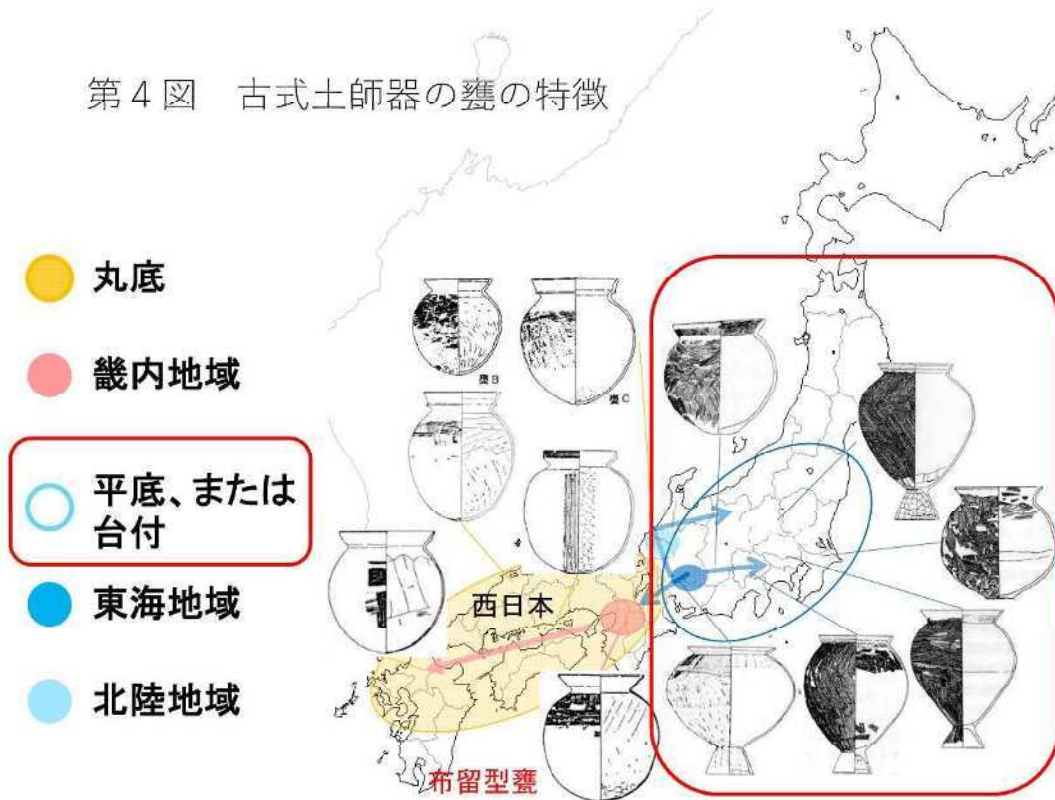
小さい分布圏(20—40 km 圏)

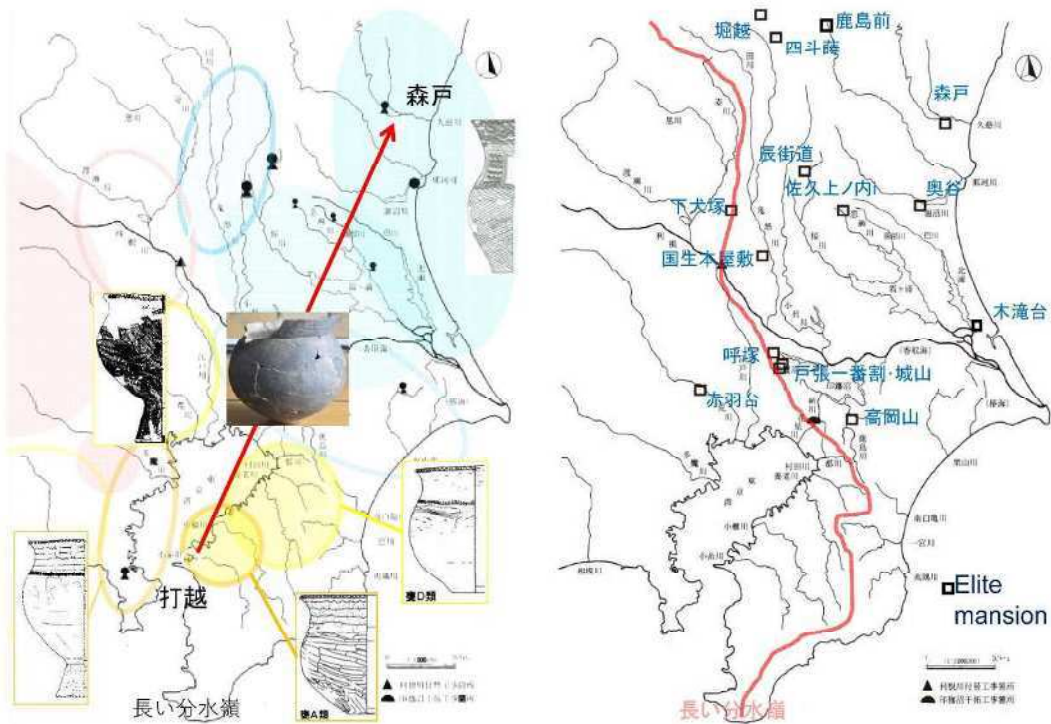


第3図 弥生時代後期の分布限界と分水嶺



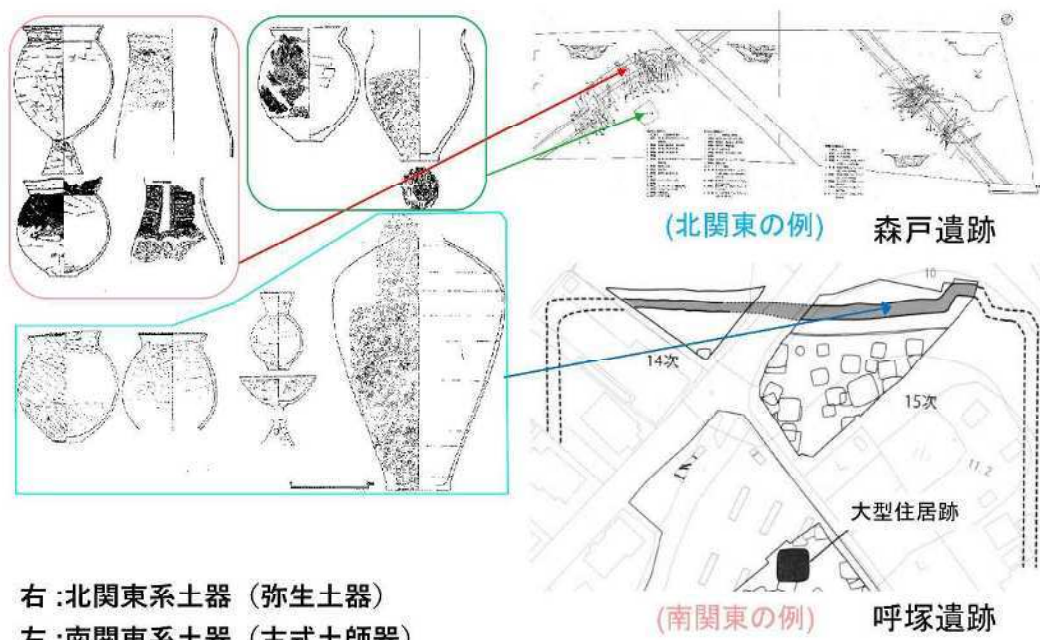
第4図 古式土師器の甕の特徴





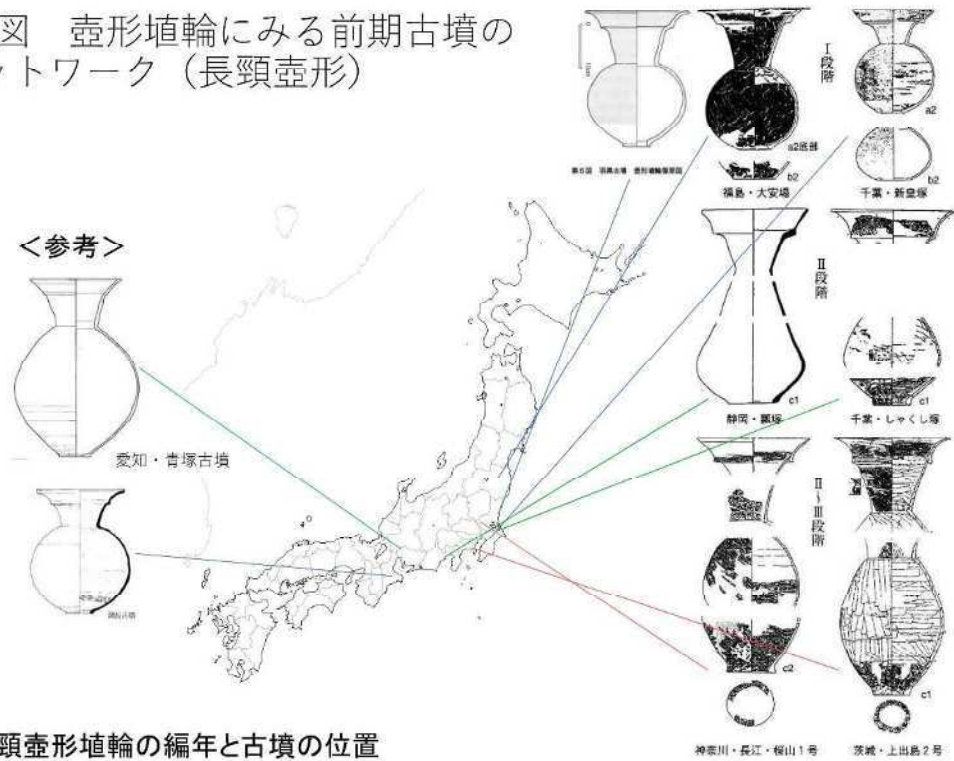
第5図 房総様式土器の北上と「豪族居館」(3~4世紀)

第6図 方形堀囲施設における双方向異系統土器の一括投棄



右:北関東系土器(弥生土器)
左:南関東系土器(古式土師器)

第7図 壺形埴輪にみる前期古墳のネットワーク（長頸壺形）



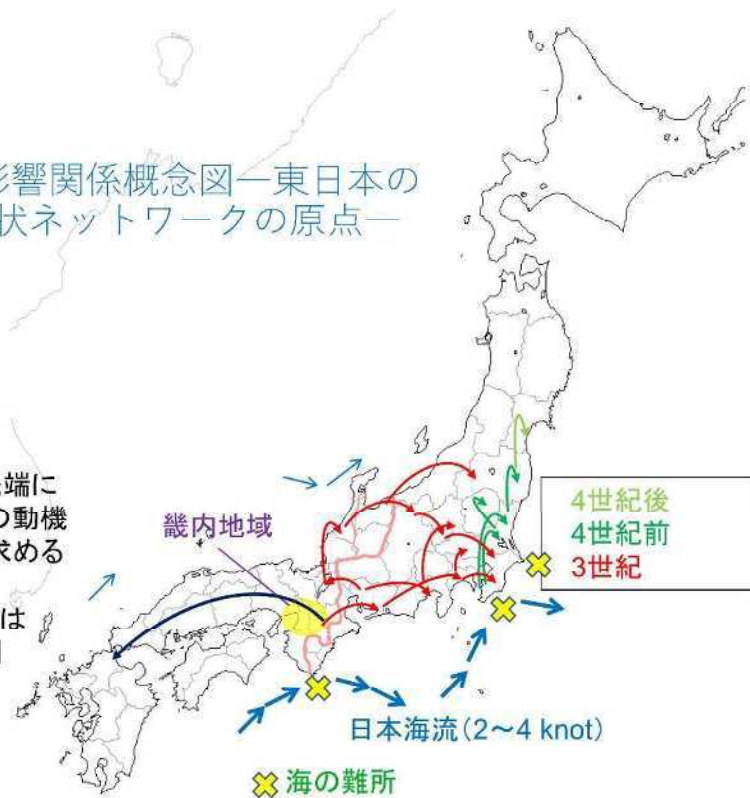
長頸壺形埴輪の編年と古墳の位置

第8図 土器の影響関係概念図—東日本の飛び石的な線状ネットワークの原点—

フロンティア拡大

間接的ネットワークの先端につらなる諸集団が自らの動機によって異文化接触を求める

のちの「小国造」の範囲は房総様式土器北上範囲と一致する





令和元年度 考古学ゼミナール
時代の移行期を探る

発行日 令和元(2019)年10月19日

編集・発行 神奈川県教育委員会 生涯学習部 文化遺産課
中村町駐在事務所(神奈川県埋蔵文化財センター)
〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1
電話:045-252-8661 FAX:045-252-8663